慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゲーテの『ファウスト』における仏教思想
Sub Title	Buddhistische Gedanken in Goethes „Faust"
Author	小林, 邦夫(Kobayashi, Kunio)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.47 (2011.) ,p.217- 248
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小林邦夫教授 退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kunio KOBAYASHI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20110331-0217

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゲーテの『ファウスト』における仏教思想

小　林　邦　夫

ゲーテの著作には東洋的な要素が潜んでいる，との指摘はこれまでもなされてきたことである。我々日本人にとってその理由は定かではないものの，非常に親しみやすい作風であり，ゲーテその人の存在が何となく馴染みやすく，日本の読者にとってゲーテは受け容れやすい作家であるとの印象を私は感じている。仏教思想とゲーテとの関連についても，これまで幾つかの研究がなされているようである。特に星野慎一著『ゲーテと仏教思想――東洋的な詩人像』（新樹社，1984 年）においては，ゲーテの思索と仏教的な思想との類似性について考察がなされている。さて本稿は，ゲーテの『ファウスト』という作品に限って，仏教的思想というものがどのように描かれているか，を探ろうとするものである。あるいは，仏教思想という立場に立った場合，『ファウスト』という作品はどのように解釈することができるか，ということでもある。原文に忠実に，原文の内容に沿って考察を進めてゆく。

第一章　一切皆苦

釈尊はカピラ城の城門を出て，城外を遊観した際，老人，病人，死人に遭遇し世を厭うようになった。最後に，威儀厳粛なる紗門（出家僧）に出会い，出家の念を固くした，という「四門遊観」の逸話[1] として経典が伝えているように，仏教においては，苦の問題は，釈尊出家の動機ともなる，

重要な出発点であり，本質的な問題である。生老病死という苦の問題である。苦はまた次のようにも説明される。「楽もその壊れるときには苦となり，不苦不楽もすべては無常であって，消滅変化を免れないから苦であるとされ，これを苦苦，壊苦，行苦の三苦という。すなわち苦でないものはないわけで，一切皆苦というのはこの意である。」[2] また，仏教と他の宗教とを根本的に区別する基本的な特徴として，「所業無常」，「諸法無我」，「涅槃寂静」の三法印を立てている点にあるが，さらに「一切皆苦」をつけ加えて四法印と呼ばれる[3]。このように仏教においては苦の問題は重要である。

『ファウスト』においてはこの苦はどう扱われているか，見てみよう。この世は総じて苦しみに満ち溢れた世界である，という認識は，『ファウスト』の物語を読む者には容易に窺えることのようである。「天上の序曲」において天上の主に苦情を言いにやって来たメフィストーフェレス（以下メフィストと略す）は，この世の現実を正直に伝えている。「日だの天だのなんてことはわたしには言えない，わたしが見ているのは人間というやつがどんなにもがいて苦しんでいるかということだけだ。」（279「天上の序曲」）ファウストも「夜」の絶望の告白の場面で，「いつの世，どこの国でも人間は苦しみつづけて，幸福な者はほんのときどきいただけだという，ただそれだけのことを，万巻の書を読んで悟れというのか。」（661「夜」），と語り，この世を苦と諦めている。なかでも「生老病死」は我々人間が避けては通れない苦の代名詞であろう。生を受けていなければ苦もない訳であるが，生を受けていること自体が不可解でまた苦の種になってくる。「さあ，ここに場所を占めた。どうしてこうなったかは，わたしたちにもわからない。どこから来た，などの詮索はご無用です，とにかくここに来てしまったのですから。」（7606 ②（再び）「ペナイオス川の上流」）とは小びとピグメーエたちの言葉である。生存の由来が分からない，というのである。「なに，ここはあなたのいらっしゃる所じゃないと。そんなことは言ってもらうまい。おれはいたいからここにいるんだ。」（5279 ①

「大広間と……」）とは宮廷での「カーニヴァル」での酔っ払いの言葉。「自分が今ここにいる」ということは「迷い込んでいるのかも知れない」が，しかし誰でも「自分が今ここにいる」権利がある，と生存の主張をしている。物語の最終場「山峡」において，「この世を早く去って昇天した童子たち」は，「お父さん，わたしたちはどこをめぐりあるいているのでしょう。やさしい方，わたしは誰なのでしょう。」（11894 ⑤「山峡」）と，自らの天上での生存の不安な心境を語っている。ファウストも「わたしはどうなることでしょう。……」（Was bin ich nun? ...）（9264 ③「城の中庭」）と，端的に語る場面があるが，「私とはさて一体何か？」と自問しているのである。「生」ばかりではなく，人間は老いて，病を患い，死すべき運命を背負っている。「亡者の霊たち」は，やがてファウストが入ることになる墓を掘りながら，次のように歌う。「ところが意地悪ものの『老い』がやってきて，杖でしたたかおれを打った。おれはひょろひょろ墓のほうへよろけた，ちょうどその墓が戸口を開けて待っていた。」（11535 ⑤「宮殿の広い前庭」）4 人の灰色の女たち（不足・負い目・憂い・辛苦）も苦を具現している。そのうち「憂い」だけがファウストの宮殿の鍵穴から忍び込むが，残りの三人は，ファウストが裕福であるために中に入ることができない。三人は帰りざまに捨て台詞を吐く。「雲が出てきた。星がかくれる。あの向こうの，遠くから，遠くから，きょうだいがやって来る，ほら，やってくる，――『死』が。」（11395 ⑤「真夜中」）生老病死を苦の本源とするならば，4 人の灰色の女たちはその苦の具体的な内容であろう。なかでも「憂い」の存在は強力である。「第二部」における「憂い」の言葉に耳を傾けてみよう。「誰でもわたしがとりこにすれば，その人には世界ぜんたいが無意味になる。永遠の闇が下りてきて，日の出，日の入りもなくなります。目や耳の働きは満足でも，心のなかには闇が巣食う。およそ宝と名のつくもをわがものとすることはできなくなる。」（11453 ⑤「真夜中」）「幸福も不幸も，ふさぎの種となり，ありあまるなかで，飢えになやむ。うれしいことも，つらいことも，明日へ明日へと延ばしてゆく。

いつも未来を待つばかりで，仕上げることはけっしてない。」（11461 ⑤「真夜中」）「だんだん深く道に迷い，すべてのことを悪しざまに見，自分にもひとにも荷厄介になる。」(11475 ⑤「真夜中」）この擬人化された「憂い」は「第一部」においてもファウスト自身が認めていた事柄でもあった。「この『憂い』はいろいろの仮面をつぎつぎに替えてかぶる。家になり，地所になり，妻になり，子供になる，火になり，水になり，匕首（あいくち）になり，毒になる。おまえはいつも，当たらぬ弾丸（たま）におののき，失わぬさきからおびえるのだ。」（647「夜」）日常の我々は，日々の生活の中で様々な心配事の中に生きている。家庭，友人関係，学校，職場，社会，国際関係の中で，何らかのストレスを感じながら生きている，という現実がある。『ファウスト』ではそれは「憂い」の存在として描かれていよう。あらゆる所に出没するのがこの「憂い」（Sorge）で，現代社会においては鬱病として，社会の病のひとつとなっているとも言えよう。これも苦と捉えることができよう。

このように，『ファウスト』においても苦の問題は人間の生存に関わる重要な問題となっていることが理解できよう。

1）『仏教思想へのいざない』，S. 17，横山紘一著，2008 年，大法輪閣。
2）『岩波　仏教辞典』，S. 195，中村元他編，1989 年，岩波書店。
3）『仏教思想の根本問題』，S. 108，菅谷章著，1997 年，原書房。

第二章　煩悩と精進

通常の我々の生活では，「貪りや怒り」の世界にどっぷり浸かり，また「誤った判断を下し，行動する」ことが多々ある。これはいわゆる「煩悩」と称せられる世界のことであろう。そしてまた同時に我々は，如何にこの「煩悩」を克服すべきかと努力し，「精進」する姿勢も忘れてはいない。仏教では「煩悩」は「心身を乱し悩ませ，正しい判断をさまたげる心

のはたらき。貪（とん）・瞋（じん）・癡（ち）のいわゆる三毒が煩悩の根本的なものであり，とくにその中の〈癡〉，すなわち物事の正しい道理を知らないこと（無明）がもっとも根本的なものとされる。」[1] そして，この煩悩の束縛を脱して真実の認識を得ることが，悟りへとつながると考えている。また，そのための実践が「精進」ということになろう。『ファウスト』においては，この「煩悩」は「迷い」（das Irren），「精進」は「努力」（das Streben）と表現されていよう。今この二つの世界を垣間見てみよう。

まず，「煩悩」は「鬼火」（Irrlicht）によって象徴されている。ゲーテの描く鬼火はどことなくユーモラスでもある。「第一部」の「ワルプルギスの夜」の場面でファウストとメフィストをその小さな灯火で先導する鬼火は，「ですが，稲妻型に歩くのが，わたしの癖でしてね。」（3862「ワルプルギスの夜」）と自らを語る。鬼火の歩みは稲妻型（zickzack）である。決して真っ直ぐには歩けないのである。ここに，努力しながらも迷いながら，ジグザグに，行きつ戻りつ，人生を歩む我々凡人の有様がよく表現されている。鬼火（迷いの火）はそのまま「煩悩」を意味し，かつその歩みは「稲妻型」なのである。物語の主人公，人類を代表するファウストも，この迷う煩悩に気づきながらも嘆くのみであるが，それを諌めてメフィストは言う：「わたしの言いたいのはこうだ。思案にふけって日を送っている人間は，悪霊にとりつかれて，草のないところをいつまでもぐるぐるまわっている牛や馬も同然です。そのまわりには，美しい緑の牧場がひろがっているのに。」（1830「書斎」（2））なかでも我々を最も苦しめるのは愛欲の問題であろう。「こうしておれは欲情から享楽へとよろめき，その享楽のさなかに，また新しい渇きに身を焦がすのだ。」（3249「森と洞窟」）老齢となり，成功者となったファウストは過去を振り返りこう言う：「おれはただひたむきにこの世界を駆けめぐったのだ。あらゆる快楽を，襟髪をつかんでわがものにした。意にみたぬものは，突き放し，逃げてゆくものは去るに任せた。ただ熱望し，ただ遂行した。」（11433 ⑤「真夜中」）ファウストが決して言ってはならなかった言葉，「瞬間よ，お前は実に美

しい。」を言ってしまい，メフィストの前に倒れる場面で，メフィストが最初に言った言葉は：「どんな快楽にも飽き足らず，どんな幸福にも満足しない，次から次と欲しいものを追っかけまわした男だった。」（11587 ⑤「宮殿の広い前庭」）欲望と快楽を求めるファウスト，次から次と姿を変えるものを求めて，決して何事にも満足しないファウスト，直情的に一本道のようにも思われるが，やはりこれは煩悩のなせる業，あちこちに引き回され，迷いの赴くままの稲妻型の歩行であることには違いはないであろう。

次に『ファウスト』における努力の精神に注目してみよう。迷いの世界に住する人間には同時に，努力（精進）の精神が宿っている。天上の主はそれを，「人間の活動はすぐたゆみがちになる，すぐ絶対的な安息を求めたがる。だからわたしは，刺激したり引き込んだりする仲間を人間につけておく，それを悪魔としてはたらかせておくのだ。」（340「天上の序曲」）と表現していよう。ここに悪魔メフィストの役割が重要となるが，「迷い」と並んで共存する「努力」の精神は，様々な状況においてその役割を発揮する。「このくらい努力しておられるのだから，それに相応する酬いはありますよ。黄金，地位，名誉，健康と長寿，それに学問，ことによったら人格も。」（6996 ②「中世風の実験室」）これはワーグナーの実験によって生まれ出た人造人間ホムンクルスの言葉である。造り主ワーグナーを讃えての言葉であるが，仏教でいう「善因楽果」というところであろうか。ワーグナーの自然科学的探求の努力は賞讃に値しよう。ホムンクルスは精神のみを有して，肉体は所有していない。真の生命体となるためにはどうしたらよいか，メフィストはホムンクルスに忠告する：「いいか，君も迷いを重ねなくちゃ知恵はつかない。生まれたいと思うなら，自分の力で生まれたまえ。」（7847 ②（再び）「ペナイオス川の上流」）ここに迷いと努力が共存している。また「生まれる」という他力と，「生まれよう」とする「自力」も表現されていて興味深い。「生まれる」ということは完全なる「受動」であるが，どこかに「生まれ出よう」とする「能動」も感じとれよう。それを自らの力による「努力」と解釈することもできよう。海の

神ネーロイスは人間という動物に腹を立て，言う：「神々の座にのしあがろうという野望に身を擦りへらしているが，とどのつまりは相も変わらぬ蛆虫どもだ。」（8096 ②「エーゲ海の……」）人間は神々と等しくなろうと努力しているが，結局，相変わらず元のままの人間の姿ではないか，という皮肉を込めた意味なのだが，ここに最高の段階を目指そうとする人類の野望が「努力」という言葉で表現されている。人類は宗教的な意味での「悟り」という体験を経験している。凡人には果たせない，選ばれた人のみに許された体験であろう。この悟りの境地への到達には，数多くの試練と，死をも覚悟した勇気と，何よりも不断の努力が必要となってこよう。財政難に陥った宮廷の再建を図るため，メフィストは地下に眠る金の採掘を提案する：「だが，宝のありかに通じた者は，……あの世のお隣まで進んで行かなければなりません。」（5016 ②「玉座の間」）この地下に眠る金の宝の発掘とは，我々の心の無意識の底に眠る「真の自己」の発見をも意味している。即ち，悟りの体験のことと解せよう。そのためには絶大なる勇気と努力（精進）が不可欠であろう。「あの世のお隣まで」とは「死とすれすれのところ」までであろうから，まさに「大死一番，絶後に蘇える」と表現される世界であろう。同様の体験をファウストは，人類の代表として何度か行うことになる。「夜」の場面でファウストは神秘な呪文を唱え，地霊を呼び出す。その際，「姿をあらわせ！　あらわせ！　この命をなくしてもいい。」（481「夜」）と，叫ぶ。母の国に降りて行く場面では，「よろしい。ひとつ底の底を究めてみようじゃないか，おれは君のいう無のなかに万有を見いだすぞ。」（6255 ①「暗い廊下」）と宣言する。空間もなければ時間もない，ただ孤独だけが支配する国への旅立ちであった。ヘレナを獲得するために，マントーの指導のもと，ファウストはペルゼフォーネの支配する黄泉の国（冥府）へと赴くが，そのマントーには，「そういう人がわたしは好きです，不可能なことを追う人が。」（7488 ②「ペナイオス川の下流」）と褒められる。そして無事に帰還したときには，「恐怖のかぎりのおれの旅は至福の獲得をもたらした。」（6489（①「騎士の広

間」）と自らの冒険を評す。いずれも短い文章で描写されているが，その背後には不可能なことを追う努力，追及心，真理の探究，即ち「精進」(努力）を感じ取ることができよう。「宝」を得るまでの道のりは死闘であったはずであるからである。さて，日常での出来事に帰ると，努力・精進の精神は次の言葉に集約されよう。ファウストは言う：「それは人智の究極の帰結で，こうだ。およそ生活と自由は，日々にそれを獲得してやまぬ者だけが，はじめてこれを享受する権利をもつのだ。」（11574 ⑤「宮殿の広い前庭」）日々の弛みない努力，それにまさる宝はない。

煩悩と精進を別個に考察してきたが，ここでこの二つを一つにして考えてみることも重要なことである。即ち，「煩悩」と精進の究極である「悟り」は一体となり得るのである。「人間はしょせん煩悩から逃れられぬということを観念し，煩悩をあるがままの姿として捉え，そこに悟りを見出そうとする〈煩悩即菩提〉の考えが，しだいに大乗仏教の中で大きな思想的位置を占めるようになった。」[1] と説明されるように，「煩悩」と「悟り」とは，ともに空なるものであり，本来は「不二・相即」し，煩悩がそのまま悟りの縁となる。「全ては真実不変の真如の現れであり，悟りの実現をさまたげる煩悩も真如の現れに他ならず，それを離れて別に悟りはない」[2] と説明されることになる。『ファウスト』においては，グレートヒェンから一時的に逃れて「森」の自然の中に逃避行をしたファウストに，いわゆる自然と一体となる「自己啓示」，即ち「悟り」が開かれる場面がある。その場面でファウストは地霊に向かい感謝の意を表するが，同時に常に自分にまつわりついている，生への誘惑者メフィストの存在に気づき，地霊に向かって次のように告白する：「おまえが与えてくれたのは，おれを神々の近くにまで高めてくれるこの純粋な喜びばかりではない，あの道連れをおまえはそれにそえてよこしたのだ。だが，それはもうおれが手放すことのできない道連れなのだ。」（3241「森と洞窟」）ここに煩悩具足の聖人としてのファウストがいる。「煩悩即菩提」の境地なのである。プロローグ「天上の序曲」において主は，「よい人間は，盲目な内部の促しに

うごかされているときも，正しい道を忘れてはいぬものだ。」（328「天上の序曲」）と語り，ファウストに対して絶対的な信頼を寄せているが，「煩悩と菩提」が同居する人間存在に対する主の鋭い洞察ということになろう。さらに単刀直入な表現は，「人間は努力する限り迷うものだ。」（317「天上の序曲」）という主の自信に溢れた言葉であろう。努力・精進の路と，迷いの煩悩の世界とは軸を一つにしているのであろう。

1）『岩波　仏教辞典』，S. 752，中村元他編，1989 年，岩波書店。
2）同上，S. 753。

第三章　輪廻転生

「輪廻」とは，「サンスクリット原語は〈流れること〉〈転位〉を意味し，生ある者が生死を繰り返すことを指すので，〈生死〉とも訳され，また〈輪廻転生〉ともいわれる。インドで広くおこなわれた考えであるが，仏教では，解脱（げだつ）しない限り，生ある者は迷いの世界である三界六道を輪廻しなければならないと考えられていた。」[1] と説明される。「解脱」とは「煩悩から開放されて自由な心境となること」[2] で，涅槃と同じ意味になるが，解脱しない限り，生老病死の輪廻を繰り返すことになるのである。釈尊は〈輪廻〉（さまざまな生命の連続性の直感）に対して〈無我〉（アートマン〈我〉の存在の，非実体性の自覚）を主張し，かならずしも〈輪廻〉というインドの伝統的な考え方ははっきり肯定も否定もしなかったようである[3]。このことから，近代科学においても問題となる輪廻と遺伝子等に関係する問題が生じてくるようであるが[4]，しかし，一般的にはこの輪廻の思想は仏教を代表する思想のひとつとして流布しているところがあると言えよう。

「第一部」でのグレートヒェン悲劇を体験したファウストは，アルプスの麓に横たわり，疲れきって不安げで，眠りを求めている様子である。そ

の周りを精霊たちが輪をつくり漂い動いている。精霊の長のアーリエルは，ファウストに授けの手を差し伸べるように，小さな精霊たちに命じ，歌う。「まず彼の頭をひやびやとした枕にのせ，それからレーテの流れの送ってくる露で浴をさせるがいい。するとほどなく，引きつっていた手足のこわばりもとれ，新しい力にみたされて，静かに夜明けを迎えることができよう。」（4628 ①「優雅な土地」）レーテの川とは，ギリシャ神話で冥府を流れている川のことで，亡霊がこの川の水を飲むと，地上のことの記憶を失うとされている。ファウストは「第一部」での苦渋に満ちた体験の後，心身ともに一度死に，新たなる再生が，この「第二部」冒頭の優雅な土地の場面で果たされる，と解釈できよう。レーテの流れの露を浴びるとは，黄泉の国，即ち三途の川を一度渡ることを意味しよう。心身共に新たなファウストに生まれ変わり，「第二部」での活躍がはじまるのである。この出来事は仏教的な意味での輪廻転生と言えよう。最終場「山峡」の場面から神秘的な色彩が濃厚となっているが，「天使に似かよう教父」（Pater Seraphicus）が「この世を早く去って昇天した童子たち」（Selige Knaben）に向かって言うくだりは，通常の感覚からは想像しがたい。「わたしの目のなかへ降りておいで。これは地上のことや世間のことはよく見慣れている目なのだから。それを自分のものとして使うがいい，このあたりの様子をよくごらん。」（11906 ⑤「山峡」）この世を早く去って昇天したが故に，幸いに童子たちは地上の道の険しさを知らない。この教父は童子たちに自分の眼をかして地上の様子を見させてあげよう，という親切心なのである。「魂が霊力をもつ者の体内にはいって，その目を借りて見るという発想は，スウェーデンボルクの書に由来し，ゲーテはこの考え方に親しんでいる。」[5] と解釈されているが，他面，死後肉体を離れた魂が，再び生身の人間の中に宿る，という思想にも通じるところがあろう。即ち，転生という現象があり得る，という主張ともなろう。第三幕「城の中庭」の場面において，ファウストとヘレナの間に生まれたオイフォーリオンの死とともに，ヘレナは再び黄泉の国に帰ることになる。ヘレナを取り巻く

護衛隊である合唱の女たちは，ヘレナの後を追って黄泉の国に戻るのはいやだと言い出す。結局，合唱を率いる女であるパンタリスのみが，忠誠心からヘレナに仕えるために黄泉の国に行くことになるが，合唱の女たちは，諸元素（自然力）（Elemente）に還る，という条件でこの世に留まり，四つのグループに変身する。「木の精」になった合唱の第一群，「山の精」(やまびこ）になった第二群，「泉の精」になった第三群，「葡萄の精」になった第四群の四つである。この四つは地（木の精霊）・水（泉の精）・火（葡萄の精）・風（山の精）（やまびこ）の四大（四元素）をも象徴していよう。この彼女たちの変身振りも，広い意味での輪廻転生の一種と考えることが許されよう。パンタリスは，「名をあげたというでもなく，気高い願いをもってもいぬものは，元素に還るほかはない。」（9981 ③「城の中庭」）と語っているように，転生先の次元は低いものとなっている。しかし，自然の力として生き生きと活動することになる。さて，煩悩を象徴する存在は鬼火であった。文字通り鬼火（Irrlicht）とは「迷いの火」を意味し，煩悩を最もよく象徴していよう。この煩悩から解脱することがなければ，「悟り」（真如）を得ることはなく，輪廻転生を繰り返すほかはない，と仏教は教える。さて，「ワルプルギスの夜」の場面で，無礼講の魔女たちの乱痴気騒ぎに乗り出したファウストとメフィスト，それに鬼火が加わりハルツの山を登り，この三者が交互に歌う場面がある。誰の言葉であるか，作者ゲーテの指示は書かれていないが，次の言葉は輪廻転生を物語っていようにも思われる。「だが言ってくれ，いったいおいらはとまっているのか，進んでいるのか。一切合財ぐるぐる廻っているらしい。しかめ顔する岩や樹も，得意げに飛ぶ鬼火らも。鬼火はしだいに増えてくる。」（3906「ワルプルギスの夜」）ファウストも，そして鬼火も，魔女たちの性の饗宴の真っ只中に入り込んでしまった。それは単なる愛欲という煩悩の火中。その限りにおいて，ただぐるぐる回る「輪廻」の世界から離れることはできないであろう。

1）『岩波　仏教辞典』，S. 837，中村元他編，1989 年，岩波書店。
2）同上，S. 225。
3）『唯識の心理学』，S. 21，岡野守也著，1995 年，青土社。
4）『輪廻転生を考える』渡部恒夫著，1996 年，講談社；『多宇宙と輪廻転生』，三浦俊彦著，2007 年，青土社，等を参照。
5）Anmerkungen S. 634, Goethe Werke Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, B 3, 11. Auflage, 1981.

第四章　因縁生起

恋する乙女の思いをグレートヒェンは歌う。「胸はこがれ思いはつのる。あのやすらぎは，もうけっしてもどってこない。……あこがれはただそのひとを追う。ああこの腕にしかととらえて，思いのままにくちづけを。たとえそのひとのくちづけにこの身は消えて失せるとも。」（3374「グレートヒェンの部屋」）ト書きには「糸車に向かって。ただひとり」（am Spinnrade allein.）と書かれていることから，グレートヒェンはこの歌を，糸車を廻し，糸を紡ぎながら歌ったことになるが，「糸を紡ぐグレートヒェン」という名で日本でもよく知られている。シューベルトによる作曲の歌では，糸車のカラカラ回る音をピアノの伴奏で上手に表現している。さて，ここで問題にしたいのは，「糸を紡ぐ」という行為，あるいは作業のことである。この後，この糸はどうなるのか。紡いだ糸は更に適当な長さに切られ，錘（つむ）に巻き取られる。巻き取られた糸は，更に一枚の布に編まれる。その布は更に用途に合わせ裁断され，一枚の衣服になる。糸になるまでの過程も同様に，絹糸なり綿糸なり，多くの手順を踏んで糸となっていることは容易に想像することができる。『ファウスト』においてはこの糸，布，織物というモティーフが周到に準備されている。

運命の三女神パルツェエたち（die Parzen）が，「第二部」，第一幕で仮装舞踏会のグループのひとつとして登場するが，この三女神は紡いだ糸を織物師に渡すまでの役割を分担している。即ち，「糸を紡ぐ」，「鋏で糸を

切る」,「糸を巻き取り，糸束にする」という作業のことである。三女神のひとりラケシスは「いそしみのうちに時はすすみ，月日は満ち，やがてその糸束は機を織る神のみ手（der Weber）に引き取られます。」（5343 ①「大広間と……」）と締めくくる。人間の寿命を司るのが運命の女神の役割だが，手元が狂い，その長さ（寿命）を間違って切ってしまうこともしばしばであることも告白されていて非常に興味深い。まさに我々の運命はこの三人に委ねられているのである。

それではその糸束を受け取る織物師は誰か。それは地霊であろう。「第一部」,「夜」の場面で，ファウストに呼び出された地霊は，ファウストを突き放し次のように言う。「経緯（たてよこ）に織り交う糸，燃える命，こうしておれは「時」のざわめく機をうごかす。神の生きた衣を織る。」（506「夜」(1)）「神の生きた衣」とはこの世界全体，宇宙全体を意味しよう。宇宙（Kosmos）はもともと秩序（Ordnung），装飾（Schmuck）と同義であるので,「神の生きた衣」とは神の飾り，装飾であり，荘厳な世界全体を指すことになろう。それは，ファウストの宮殿の望楼で見張りの役を仰せつかるリュンコイスが，感激に浸りながら歌った世界のことであろう：「こうして世界のすべてにわたしは永遠の飾りを見る。そして世界のすべてがわたしの気に入るように，わたし自身もわたしの気に入る。幸福な二つの目よ，お前がこれまでに見たものは，どんなものでも，やっぱりほんとうに美しかった。」（11296 ⑤「夜更け」）さて，このような荘厳に飾られた世界は神の衣として，地霊の言葉に従えば，一瞬一瞬，縦糸（経）と横糸（緯）を交差させて一本一本織ってゆくことによって作られてゆくのである。

さてここで，仏教でいう縁起の問題を採り上げることができよう。「縁起」とは：「縁によって起こること。原因によって生じるという理。詳しくは因縁生起といい，因〈根本原因〉と縁〈補助原因〉とによって生起することをいう。因果性によってすべての現象的存在が生じるという道理を表した語。」[1] と説明される。内容的にはさまざまに解釈されるが，特に重

要なのは，「さまざまな縁より生じ，生じた刹那に滅し，滅した刹那に生じるというありようをいい，刹那に生滅しつつ相続する存在性をいう。」[1] ということであろうか。この「縁起」を実践的に体験するには，「所業無常」と「諸法無我」，同時にまた「涅槃寂静」[2] の境地を修することが必須となってくるようである。さてここで，地霊の動かす機織仕事の目的である「神の生きた衣」と「縁起」の問題を結びつけて考えてみたい。その仕事は「縦糸」と「横糸」を互いに因とし，縁として交差させ，一瞬一瞬その様相を変えながら布として織ってゆくことである。因果法則に従って布は出来上がってゆく。縦糸と横糸の交点，即ち織目は，全ての他の織目と連絡し合い，互いに関連し合っている。そして一瞬一瞬，織目が増える毎に，新たな相互関係が出来上がってゆく。同じ状態であることは決してない。それは「無常」であろう。またその織目を自我と名付けるならば，その自我は他の全ての織目（自我）との関係によってのみ存し，それだけを取り出して自我であると主張することはできない。それは「無我」であろう。自我は存在するように見えても，在るのはただ，互いの関連のみである。それは「空」と名付けられるものであろう。地霊の織る布は完成することはなく，織り続けられてゆく。

メフィストは「書斎」の場面で，ファウストに成り代わって，面談に来た学生を愚弄するが，その際，はじめに論理学を学ぶ重要性を教える。論理的思考を思想の工場の機織仕事に譬えてこう言う：「一足踏めば数千本の糸がうごいて，梭（ひ）が右へ飛び，左へ飛ぶ。目にもとまらず糸が流れ，一打ちすれば数千の織目ができる。」（1922「書斎」(2)）メフィストのこの言葉は，地霊の機織仕事を詳しく述べている，と解せよう。論理的思考の過程のみではない，この世で起こる事柄は，無数の事柄が無数に関連し合っている何ものかなのである。まさに因縁生起の現象である。メフィストは更に言葉を続ける。「第一段がこうである。第二段がこうである。しかるがゆえに第三段と第四段はこうだ。もし第一段と第二段がなければ，およそ第三段と第四段はありえない，とな。」（1930「書斎」(2)）この論法は，

期せずして，釈尊が縁起説を生み出した際の論理と同様である。釈尊は，「植物の種子→芽→花→果実→種子→……という植物の循環現象を見て，ある現象はそれぞれ前段階のものが存在してはじめてその現象は生じてくることを悟る。逆に種子がなければ芽をふかず，花が開かなければ果実は結ばない。このことから，釈尊は次のような因果法則にまとめあげた。A，此れ有るが故に彼れ有り。此れ無きが故に彼れ無し。B，此れ生ずるが故に彼れ生じ，此れ滅するが故に彼れ滅す。」[3] メフィストの否定的論理「もし第一段と第二段がなければ，およそ第三段と第四段はありえない」が不可欠な要素となっている。このA，Bの形でまとめられる縁起の定義の眼目は，「いかなる事象といえども，その存在根拠を自己自身にのみ置くことはない，かならず他者との相互関係の上にその存在は存在しうる」[4] ということになろう。

『ファウスト』の他の箇所でも，この縁起の定義は，自然の観察から得られた因果関係として描かれている。天上の主の言葉：「庭師でも，苗木にみどりの芽がふけば，やがて年々それが花を咲かせ，実をつけることを知るではないか。」（310「天上の序曲」）メフィストの言葉：「種さえ蒔いておけば，時が来れば実りがある。」（6604 ②「高い丸天井をもつゴシック風の狭い部屋」）同じくメフィストの言葉：「幼虫や蛹を見れば，それが将来，目のさめるような美しい蝶になることは，すぐわかる。」（6729「同上」）

グレートヒェンが糸車を廻しながら糸を紡ぐ様子も，地霊が機織仕事をしているのと同様に，時々刻々移り往くこの世の現象世界を司る女神として感じ取ることもできよう。この世を動かしている女神ともなろう。また運命の三女神パルツェエたちも，その名のように我々の運命を司り，女神として君臨している。それはやはり，原糸，糸，布，衣といった織物に関係する仕事のイメージがそうさせるように思える。主人として糸を操る仕事をし，少しずつ世界を作り上げてゆくイメージが感じられるのである。尚，「機を織る」「織物に従事する」という意味で，weben という動詞が

使われているが，この語は，「動く」「活動する」という意味でも使われ，『ファウスト』中では多用されている言葉のひとつである。この世での我々の活動は，神の衣が次第次第に完成に向かって織られているかのような印象を与える。

1)「唯識仏教辞典」，S. 84，横山紘一著，2001 年，春秋社。
2)「涅槃寂静」:「自己の心身のなかから，ありとあらゆる汚れを除去して，存在的にも，認識的にも束縛なき自由な状態」をいう。『仏教思想へのいざない』，S. 113，横山紘一著，2008 年，大法輪閣。
3）同上，S. 82。
4）同上，S. 83。

第五章　禅思想

第二章においてファウストの煩悩と精進という相反する精神を考察したが，その際に，努力・精進という観点から，すでに禅思想について触れていた。「母たちの国への降下」と「マントーによる冥府への通過」で，いずれもファウストの体験であった。それはファウスト個人の偉業というよりは，人類の代表者として，先人の英雄たちが到達した境地とみるのが妥当であろう。物語上はファウストの行為であるが，「書斎」の場面で，「そして全人類が受けるべきものを，おれは内なる自我によって味わいつくしたい。おれの精神で，人類の達した最高最深のものをつかみ，人間の幸福と嘆きのすべてをこの胸に受けとめ，こうしておれの自我を人類の自我にまで拡大し，そして人類そのものと運命を共にして，ついにはおれも砕けよう。」（1770「書斎」(2)）とファウストが宣言しているように，ファウストの数々の冒険は人類を代表する行為でもある。今，次の四つのファウストの体験を振り返ってみることにする。

まず，「地霊との出遭い」という特別な体験があった。この体験は魔術による交霊にも似て，神秘的かつ魔術的であった。偉大な霊を呼び出すこ

とに成功したということには大きな意義があろう。しかし，寂静な状況ではなかった。まだ書物による知識のみの世界からの呼びかけで，ファウスト自身の真の体得とはなり得なかった。燃える火炎の中から大地の霊は出現し，ファウストにはそれを受け入れる余裕はなかった。従って，「おまえはおまえに理解できる霊に似ているのだ。おれには似ていない。」（512「夜」）と言われ，地霊にファウストは突き放されたのであった。しかし，この体験が次の三つの体験への契機となっているということになろう。それは「森と洞窟での体験」，「母たちの国への下降」そして，「マントーによる冥府への通過」である。いずれも静寂の中での出来事であり，状況は異なるものの，仏教的な意味での「悟り」体験と看做すことができるように思える。「森と洞窟」の場面では，ファウストは森の洞窟に坐り込み，瞑想していたときに，自然と一体になるという境地を味わっている。「お前はおれを静かな洞窟にみちびいて，そこでおれというものをおれ自らに見せてくれた。するとおれ自身の胸にひそむ深い神秘と驚異が，覆いをとってあらわれたのだ。」（3232「森と洞窟」）それは，「自己」即「自然」，「自然」即「自己」，「宇宙」と一体の「自己」が開示されたことを意味しよう。「母たちの国」への冒険の場合は，メフィストにいろいろ忠告を受ける。:「それじゃ出かけなさい。降りてゆくがいい。昇るがいい，そう言っても同じことだ。この世にあるものに背を向けて，存在に縛られぬ形の国に行きなさい。とうの昔に地上のありかたを離れたものに心をあそばせなさい。生成のざわめきが雲の去来のように組んづほぐれつしているでしょう。」（6275 ①「暗い廊下」）あらゆる存在が生まれては消滅し，消えては生成する，有であり，無である世界。空間もなければ時間もない。ただ孤独だけが支配する世界，とメフィストが語る「母たちの国」である。「マントーによる冥府への通過」の場面では，巫女マントーの指示に従い，黄泉の国にいるヘレナを迎えに行くという冒険であった。文字通り，死の領域への突入であろう。「母たちの国」も「冥府」も，いずれも禅的な悟りの体験との同質性を有しているように思われる。

さて，その禅における「悟り」の境地であるが，悟りは「仏教の究極目的であり，悟るために様々な修行が説かれ実践される。悟りの境地は涅槃といい，寂静と意訳される。煩悩を制御してとらわれのないこころの静けさである。それは真理そのものであるから，真如，法界，如来蔵とも呼ばれる。」[1] 禅宗においては坐禅を通して得られる禅定を専らとする修業となるが，そこで中心課題となるのは，「己自究明」と名づけられる「真実の自己の究明」と，「無」と「空」の問題であろう。

今，『ファウスト』における無と空を理解するために，無と空の意味するところを簡潔にまとめてみよう。「無」は「①存在しないもの，ものが存在しない状態，非存在（性）。有に対する。②否定辞として（例えば無常は常住でない場合のように）。③ものが存在しないことは，それが認識されないことによって知られると考えられる。すなわち，あるものが認識されないことが，それが存在しないことの根拠とされる。」[2]「空」は「般若心経や竜樹の『中論』などの考えでは，認識され従って存在するとして実体視されたものは，実はその実体性を欠く〈空〉なるものであると主張。〈無〉はものについての否定的な認識判断であるが，〈空〉〈空性（くうしょう）〉の考えは〈無〉が一つのものとして実体視されることさえ拒否するもので，有無を越えている。その意味で有無を離れたものが空性の立場である。」[2] この空思想と，中国の老荘思想の「万物の根源は〈無〉であるとする思想（「天下万物は有より生じ，有は無より生ず」（『老子』））が結びつき，いわゆる本無（説），〈無〉と〈空〉は同義，一歩進めて，〈空〉は相対的なレベルに留まるが，〈無〉は（空）（不空）を越えた絶対的なものと理解された。中国・日本の禅思想で〈無〉を重視するのは，この流れを汲んだもの。」[2] この「無」はいわゆる「絶対無」と称せられる，禅体験の真髄であろう。

このような無と空の思想的背景を考慮すれば，上に挙げたファウストの三つの体験も，禅的なるものに集約された無と空の体験の幾つかのバリエーションとして理解されよう。

次に他の箇所での，禅的体験ないし禅的雰囲気と理解され得る描写にも目を向けてみよう。吸血鬼，魔女エリヒトーの言葉は辛辣である：「自分自身の心を支配することのできぬものは，驕慢の思いにまかせて，かならず隣人の意志を支配しようとするのですから。」（7015 ②「ファルザルスの古戦場」）この言葉は，「真の自己とは何か」を窮めた者の発する言葉であろう。「自分自身の心を支配することのできる者」とは「悟り」を得た者であろう。その境地に至らぬ者は，他と争い，自我のみを主張し，戦争を犯すしかない。墓場と戦場に流れた血を吸う吸血鬼エリヒトーならではの達観した悟りの境地である。獣性が溢れる魔女であっても，それは不思議ではない。決して矛盾しない。「娑婆即寂光土」「生死即涅槃」「煩悩即菩提」の住人であろう。同じ意味では，下半身は獅子，上半身は人間の姿をしたスフィンクスの場合も，透徹した悟りの境地に達していると看做すことができる。スフィンクスの言葉：「わたしたちはエジプトの昔から，幾千年も同じところにじっと坐っていることに慣れていますの。」（7241 ②「ペナイオス川の上流」）「ピラミッドの前に坐って，もろもろの興亡を見ています，河の氾濫，戦争，平和――けれどわたしたちは眉毛ひとつ動かしません。」（7245「同上」）「わたしが動かずにいますと，時がそのまわりを回ります。」（7481「同上」）自己を象徴するピラミッドを護って，その前に坐り続けているスフィンクス。幾千年も同じところにじっと坐っているというのであるから，悟りを得られぬはずはない。周囲の喧騒をよそに，涅槃寂静の世界を味わっていよう。また通りかかる旅人に，「朝は四脚，昼は二脚，夕は三脚のものは何か」と謎をかける。ゲーテの『ファウスト』では逆に，メフィストに謎でもかけていただきましょう。」と言われ，スフィンクスは「あなたご自身のことを言ってごらんなさい，それがもう謎になりますわ。」（7132「同上」）と答えるが，いずれも「真の人間とは何か，真の自己とは何か」と問うているのである。それは己自究明を宗とする禅問答にも似ていよう。「魔女の厨（くりや）」での魔女の言動は，もっと具体的に禅的世界を表現していると考えられる。

メフィストはファウストの若返りを図って，ファウストを「魔女の厨」に連れ込む。魔女に不老長寿の若返りの薬を所望するためである。魔女は留守のため，メフィストは尾長猿たちの相手をする。猿たちは鍋の中身を掻きまぜているが，それは「乞食たちにほどこす薄いお粥」（2392「魔女の厨」）を煮ていることが判る。「薄い粥」というのは，禅門では「天井粥」といって，天井が映るくらい薄いお粥のことをいう。また，禅僧は「乞食（こつじき）」とも呼ばれ，金になる仕事はせずに，托鉢をして身を養うように定められている。修行に専念するためである。してみると，この厨（台所の意味）の主人の魔女は大した人物である。修行中の僧侶たちのために施しをしていることになるからである。メフィストと猿たちとの間で，いわゆる「問答」（Diskurs）も行われる。その 1：M「おかみさんは，いつもどのくらいのあいだ，外で浮かれて，うちへ帰るんだい？」猿「わたしたちが手をあぶっているあいだなの。」（2384）その 2：M「あの篩（ふるい）はなんにするんだ。」猿「もしあなたが泥棒なら，これですぐ見分けます。」（2416）その 3：M「それでこの鍋は？」猿「阿呆なひとだ。鍋もご存じない，釜もご存じない。」（2422）ちょっと的外れな，意外な返事が返ってくる。その答え方は禅問答を彷彿とさせるところがある。ファウストには猿たちはお気にめさないようであるが，メフィストにとっては；「いやいや，そう言ったものでもないでしょう。いましたような問答が，わたしのいちばん好きなやりとりでしてね。」（2388）と，ご満悦である。さて，主人の魔女が帰って来て，薬をファウストのために作ることになるが，その際に呪文を唱える。ひとつは「魔女の九九」といわれる数に関する難解なものであるが，今ひとつは：「それ，高き力は，学術にも，全世界にも隠されたり。ただ思量せざる者には，授けらるべし。労することなくそれを得ん。」（2567）というもので，ファウストにとっては，馬鹿者が百万人あつまってわめいているのを聞いているような気がする。しかし，そうであろうか。この言葉こそ，まさに禅の精神であると言わねばならない。「高き力」，これは「本当の智慧」，つまり「悟り」のことであろう。それ

はどんなに学問〈学術〉をしても得られない，世界中探しても見つからない（全世界に隠されたり）というのである。しかし，もし，考えることをやめたら（思考せざる者には），簡単に得られるというのである。禅門では，「不思量低を思量せよ。」と言う。「何も考えるな，そこを考えてみよ。」ということである。つまり，思考を止揚することが肝要となっている。学問は分別の世界であり，二元対立の世界である。「悟り」の主観と客観がひとつになった，「主客未分の世界」を体験するためには，理性の力で考えてはだめで，考えないことに徹底しなければならない。つまり馬鹿になりきることが求められる。この魔女はすごい。

1）『岩波　仏教辞典』，S. 306，中村元他編，1989 年，岩波書店。
2）同上，S. 777。

第六章　唯識思想

唯識思想とは，「存在するものは唯だ識，すなわち心のみである，あらゆる事象は心が変化したものにすぎない，という根本命題を中核とした大乗の一思想である。瑜伽行派（ゆがぎょうは）と呼ばれる学派によって紀元後三，四世紀ごろに成立した。初期の論者としては弥勒，無着，世親の三人が有名である。」[1] いま少し説明を要するとすれば，「般若経の空の思想を受けつぎながら，しかも少なくとも識は存在するという立場に立って，自己の心のあり方をヨーガの実践を通して変革することによって悟りに到達しようとする教えである。サンスクリット語で〈ヴィジュナプティ〉（唯）とは〈知らしめる〉という意味で，唯識とは語源的には，自己と自己を取り巻く自然界との全存在は自己の根底の心である阿頼耶識（あらやしき）が知らしめたもの，変現したもの，という意味である。唯識思想の特徴としては，1）心の種類として，眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識・末那識（まなしき）・阿頼耶識の 8 種類をたてること（八識）。このうち後の二つがいわゆる深層心理に属する。

2）三性説を新たに打ち出したこと。全存在を心のなかに還元し，しかもその全存在のあり方を，遍計所執性（分別された非存在）と依他起性（因と縁という他なるものに依って生起した仮の存在）と円成実性（完成された真に存在するもの）の 3 種類に分類した。3）ヨーガを実践することによって唯識という具体的な観法を教理的に組織体系化したこと。」[2] となろう。

では，ゲーテの『ファウスト』ではこの問題がどのように描かれることになるのか見てみよう。「私が今現実に見ているものは遠い世のことのように思われ，すでに消え失せたものが，私にとって現実となってくる。」（31「捧げることば」）ファウストの物語に先立ち，ゲーテは三つのプロローグを載せているが，その最初のプロローグ「捧げることば」の一節がこの言葉である。誰に捧げた詩であるかと言えば，かつて愛し，親しくしていた，また今は離れ離れになった人々への献詩である。「すでに消え失せたもの」とは，「すでにこの世を去って逝った者」のことで，「また近づいてきたか，揺らめく影たちよ，」（1「同上」）と詩人が呼びかける「揺らめく影たち」（schwankende Gestalten）でもある。詩人ゲーテの眼前に現れた，昔親しく交わった人々の幻影である。正しく言えば，その幻影は詩人の心の目の中に現れた幻であろう。しかし，その幻は詩人にとっては，決して忘れることのできない現実の姿なのである。反対に，今この手中にある現実は，もし全く心の通わぬものであるならば，まさに幻影と同等であり，遠い世に押しやられたも同然であろう。この逆説が面白い。また，この「幻影と現実」との対比は，「仮象と現実」の問題でもあり，『ファウスト』における重要なテーマともなっているように思われる。今見ている世界は，本当に真実の姿なのか，有為転変のうちに繰り広げられる仮の姿ではないか，という疑問である。ここに仏教的な意味での仮の相，即ち依他起性と呼ばれる，因と縁という他なるものに依って生起した仮の存在を認めることができよう。現実に見ている事象は，常に変わらず存在する固定的な実体ではなく，幻影，夢，響，陽炎の如きものであるという認識で

ある。無常と無我との真実が縁起という法によって現れた仮の姿である。残されたものは実体なき関係性の世界だけとなる。逆に，とうの昔に過ぎていった幻の如き姿が，今こそ現実の真の姿であり，イメージとして懐かしく想い浮かんで来るというのであろう。また同時に，現実の姿こそないが，我々の意識の中に深く刻み込まれた真の姿ではないのか，現にそこにあるではないか，という感慨となっている。ゲーテの『ファウスト』においては霊的世界こそ現実であり，現実世界は単なる仮象にすぎないことが，繰り返し物語られることになる。その意味ではこの「捧げることば」は，全くファウストの物語と関係がないようでいて，その実，本質的な意味において，真の「プロローグ」となっているとも言えよう。以下，何が現実で，何が仮象であるか，類似した事象を並べることにより，どう判断したらよいか迷う事柄を，幾つか挙げてみよう。催眠術，幻影，魔術，二重身（二重映像），幻聴等であるが，その判別がつき難い，というところが，まさに仮象と現実の問題なのである。そしてそこに，真実の姿が隠れているのであろう。

「仮象の形，虚妄のことばは，心を転じ，居所を転ず。汝ら，ここにありて，かしこにあれ。」（2313「アウエルバッハの酒場」）「迷妄よ，目かくしを去れ。悪魔のたわむれを心に銘ぜよ。」（2320「同上」）メフィストが「アウエルバッハの地下酒場」で学生たちに催眠術をかけた場面，またそれを解いた場面である。催眠術をかけられた学生たちは，葡萄畑の幻影を視る。互いの鼻を葡萄の房と思い，房を採ろうとナイフで傷付け合う。顔からは血が流れ出る。幻影で視た葡萄畑は，やはり幻影にすぎなかったのか，あるいは現実なのであろうか。心に映った映像は現実であることには違いはないであろう。実際にいる場所は居酒屋である。しかし，それにも拘わらず，視ている世界は葡萄畑なのであった。心で感受した姿は，現実から見れば虚妄であろう，仮象であろう。しかし実際に視ていたのである。ここに仮象こそ現実である，という主張が成り立つ余地がある。そして，現実に我々が見ている世界は真実の姿ではない，という可能性が生じ

る。同様の出来事が，メフィストの幻術，魔術という形で度々行われている。カーニヴァルの終焉は皇帝の髭に火がついて，宮廷が猛火に襲われるという結末で終わるが，これも幻影であった。皇帝はそのことを回想してこう言う：「それは幻影にすぎなかった，しかし偉大な幻影だった。」（10420 ④「端山の上」）戦争に勝利するためにメフィストは水の魔術を駆使する：「さあさあ，黒いいとこたち（烏のこと＝筆者注），急ぎの使いに立ってくれ。山奥の大湖（おおみずうみ）へ飛んでいって，水の精のウンディーネたちに，おれの挨拶をよく伝えて，そこにあるだけの水のまぼろしを借りてこい。彼女らは，容易には見抜けぬ女性の術で，実体抜きのまぼろしだけをうまく使う。そしてみんなはその手にかかって，そいつを実体だとおもいこむのだ。」（10711 ④「端山の上」）「ところがわたしの目にはそういう見せかけの水なんか，ちっとも映らない。人間の目だけがだまされるのですよ。わたしはこの変妙な光景が面白くてたまらない。」（10734「同上」）水の精ウンディーネたちに借りた水で大洪水を起こし，敵を敗北に追い込むことに成功する場面である。悪魔メフィストの面目躍如というところである。メフィストの目は冷静で，見せかけの水には幻惑されない。人間だけが騙される，と言っている。人間は真実の姿を見ていない，というのである。二重に映る像についても同様であろう。「若い女たちのすこやかな肢体が，水の鏡に映って二重におれの目をたのしませてくれる。」（7283 ②「ペナイオス川の下流」）ペナイオス川で水浴びをする女性たちの姿をファウストはこう語る。若い女たちの実際の姿と，その水に映った映像の二重身である。水の鏡に映った像は，正確に言えば真実の女性たちの姿ではない。虚像である。しかしそれを見るファウストの目からすれば真実の姿に映る。我々の心に映る像はいかなる像であろうとも真実である。唯（ただ）心のみが存するのである。像は二つある。どちらかが実像でどちらかが虚像である。現実の我々は虚像のみを見て，真実の像は見ていない，とも言えるであろう。二重に映る月にも同様のことが言えよう。妖鳥ジレーネたちが海の祭りへと誘い，「月は空と海に二重に照って，きよらかな露でわた

したちを濡らします。」（7513 ②（再び）「ペナイオス川の上流」）と歌う場面がそれである。月には様々な象徴が隠されているが，月の周りを雲が蔽う現象は特別な意味を持っているようである。「月のまわりに幅広く，大きい雲の輪が描かれました。あれは愛に燃えたつ鳩の群れです。翼は光のように真っ白です。」（8339 ②「エーゲ海の……」）エーゲ海にやって来たジレーネたち。月は中天にかかっている。その月の周りに雲がかかるが，それを見てジレーネたちがこう歌った。それは月の暈（かさ）に過ぎず，普通は大気の現象だといって片付けてしまうところを，月の暈を鳩の群れと表現したのである。ジレーネたちにとって，月にかかる雲の暈が鳩の群れに見えた，ということは吉兆を意味し，心にそのように映ったことに他ならず，それで十分なのであろう。自然現象としての真実の姿は見ていないが，仮象として鳩の群れを見ている。それが現実だと言うのである。「見る」ことに限らず，「聴く」ことに関しても同様となろう。「岩の戸はからからと音高く開き，太陽神の車輪は轟然と驀進する。光の音のなんというすさまじさ。」（4669 ①「優雅な土地」）「聞きも及ばぬ響きを聞くことは堪えがたい。」（4674「同上」）夜が明けて朝の太陽が勢いよく昇って来る。その凄まじい光景をアーリエルはこう歌った。太陽の光線に音があるというのだ。その光の音は凄まじく，それを聴く耳は癈（し）いる程だ。そのようなことはあり得るのかどうか，つい自然科学的に考えてしまう。しかし，アーリエルの耳にそう聴こえたのなら，心の現実として，真実なのである。「世界の見え方はもっぱら心のあり方による」[3]，という唯識の認識論として真実なのである。従って，ファウストが「書斎」で語ったモノローグ：「そして知ったのは，おれたちは何も知ることができないということだけだ。」（364「夜」（1））という「無知の知」の告白は，唯識という観点からみれば，通常われわれは真実相をみることなしに生きている，真実をありのままに見ることは如何に難しいか，ということを物語るものとなろう。

「唯識思想を打ち出した瑜伽行派が仏教思想史上において果たした一大貢献は，深層心理ともいえるアーラヤ識（阿頼耶識）を発見したことであ

った。」[4] とされる。眼識・耳識・鼻識・舌識・身識の五つの感覚と意識との六識は，表層心で，直接その存在を知覚することができる。瑜伽行派は「その表層心の底に存在し，しかもそれらを生み出す根源的なこころを発見したのである。このアーラヤ識の発見にはヨーガ（瑜伽）の実践が大きく寄与したと考えられている。」[4] また，「その瑜伽の原語ヨーガ（yoga）は，結びつけるという意味の動詞 yuj に由来する名詞である。元来は牛馬を車に結びつけること，従って軛（くびき）という意味を持ち，転じてこころを統御すること，さらには専念する・実践することという意味となり，広く精神を統一する修行を総称することばとなった。」[5] と説明される。即ち，感覚器官を抑制，統御して，順次心理器官の抑制まで及び，最終的に解脱を目指すものであろう。

さて，『ファウスト』に戻ると，この「牛馬を車に結びつける」ことの喩え，即ち，「牛馬と車」の関係を表す場面が『ファウスト』に見られるのである。宮廷でのカーニヴァルの場面で，少年御者が操る「四頭立ての龍車」が登場する。背後には富の神プルートゥスを乗せている。少年御者は言う：「龍よ，翼をやすめろ。いつものように手綱にしたがえ，わたしはお前たちに命令する，お前たちは自分自身に命令しろ。わたしが拍車をかけたら，また走れ。」（5520 ①「大広間と……」）プルートゥスに向かって言う：「わたしはあなたから疾風（はやて）のようなこの四頭だての龍車を任せられた者ではないでしょうか。それをいつもお指図どおりにうまく御してはいないでしょうか。お望みの場所にぴたりと着けることができないでしょうか。」（5612「同上」）「少年御者」の命令に「龍」が従い，それに「車」が従う。その限りにおいて，意志の働き通りに「手足が働き」，行為が成り立っていよう。しかし，それはまだまだ少年御者の「自我」のみの「意識」の領域であろう。結局は，プルートゥスという「アーラヤ識」（自己）の指示通りに働いていた自分であった，と少年御者は自覚をしている。ここに，「アーラヤ識」（自己）の命じるままに働く「意識」（自我）を感じ取ることができよう。深層と表層の意識の問題として，この少年御者の操

る龍車を考えてみることができるであろう。また，手綱を握り，抑制し，また拍車をかける少年御者から，こころを統御する働きも感じ取ることができよう。即ち，唯識でいうこころの構図が描かれているのである。また，同じカーニヴァルの場面に登場する，象を御している「賢さ」という女性の場合も，同様に考えることが許されよう。「恐怖」と「希望」を鎖に繋いで引き連れ，この象の背には勝利の女神ヴィクトーリアを乗せた塔が聳えている。「女神をつつむ栄ある光は，遠くあまねく照りわたっている。その御名はヴィクトーリア［勝利］この世のすべてのいそしみごとの女神（Göttin aller Tätigkeiten）です。」（5453 ①「大広間と……」）と，「賢さ」自身に紹介されるように，この勝利の女神こそが，「あらゆる行為の女神」であり，真の行為を生み出す「アーラヤ識」なのであろう。

1）『仏教思想へのいざない』，S. 270，横山紘一著，2008 年，大法輪閣軛。
2）『岩波　仏教辞典』，S. 809，中村元他編，1989 年，岩波書店。
3）『唯識の心理学』，S. 40，岡野守也著，1995 年，青土社。
4）『仏教思想へのいざない』，S. 284，横山紘一著，2008 年，大法輪閣。
5）同上，S. 200。

第七章　浄土思想

グレートヒェンはまだ少女ではあるものの，自立した一市民であり，ミサに通い，神を信じ，糸を紡ぐ仕事をしていた。母との二人暮らしで，兄は兵隊であり，一庶民として慎ましい生活を送っていた。懺悔することが何もないのに懺悔に行くほど純真で，無邪気な娘であった。「ああいうのは私の力におよびませんね。」（2626「街」）メフィストに，こう言わしめたほど純粋な子であったグレートヒェン。そのグレートヒェンはファウストを恋することにより，結果的に大きな過ちを犯すことになってしまう。睡眠薬の誤用により母を死に至らしめる。兄のヴァレンティンはファウストの剣によって返り討ちに合い，殺される。自らの子を沼に投げ捨ててし

まうという，嬰児殺しを犯す。ファウストとの間に生まれた「不義の子」の始末に困った末のことではあったであろうが。罪であろう。投獄される運命となる。恋人のファウストにもその責任があることは言うまでもない。これがいわゆるグレートヒェン悲劇といわれる出来事の罪の内容である。ここに，罪に対するその報いはどうあるべきか？　また，その罪に対する救済はあるのか？　という問題があろう。

ここで想起すべきは，親鸞の『歎異抄』第三条における悪人正機のパラドックスであろう。今，原文を掲げてみよう。「善人なをもて往生をとぐ，いはんや悪人をや。しかるを，世のひとつねにいはく，悪人なを往生す，いかにいはんや善人をや。この条一旦そのいはれあるににたれども，本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは，自力作善のひとは，ひとへに他力をたのむこころかけたるあひだ，弥陀の本願にあらず。しかれども，自力のこころをひるがえして，他力をたのみたてまつれば，真実報土の往生をとぐるなり。煩悩具足のわれらは，いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるを，あはれみたまひて願をおこしたまふ本意，悪人成仏のためなれば，他力をたのみたてまつる悪人，もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ，まして悪人はと，おほせさふらひき。」[1] 親鸞はまず「善人ですら極楽浄土へ行くことができる，まして悪人は，極楽浄土へ行くのは当然ではないか，私はそう思いますが，世間の人は常にその反対のことをいいます。悪人ですら極楽へ行くことができる，まして善人は，極楽へ行くのは当然ではないかと。」[1] と，いわゆる社会的通念，倫理観を根底から覆し，逆説を提示する。その理由は，自力作善（さぜん）のひと，つまり「みずから善を励み，自分のつくった善によって極楽往生しようとする人」[1] は，「おのれの善に誇って，阿弥陀さまにひたすらおすがりしようとする心が欠けていますので，そういう自力の心がある間は，自力の心を捨ててただ阿弥陀さまの名を呼べば救ってやろうとおっしゃった，阿弥陀さまの救済の本来の対象ではないのであります。」[1] ということであり，煩悩具足のわれら，すなわち「心の中にさまざまなどす黒い欲望をいっぱい持つ

者」[1] が，「どういう行によってもこの苦悩の世界を逃れることができないでいるのを阿弥陀さまはあわれんで，あの不可思議な願いを起こされたわけですから，もともと阿弥陀さまの願いをおこされるほんとうの意思は，この悪人を成仏させようとするためでありましょうから，自分の中に何らの善も見出さない，ひたすら他力をおたのみするわれらのごとき悪人のほうが，かえってこの救済にあずかるのに最もふさわしい人間なのであります。」[1] と，いうところにある。

「『歎異抄』における，このひたすら他力を頼む，煩悩具足の悪人の念仏は，『ファウスト』におけるグレートヒェンの苦悩と祈り，救済への懇願となっていることになろう。グレートヒェンはただマリアにすがり，祈る。「痛み多いマリアさま。どうぞお恵み深く，わたしの苦しみにお顔をお向けくださいまし。」（3587「市壁の内側に沿った小路」）その涙は，マリアに捧げる花の植木鉢を潤すほどであった。ファウストは，グレートヒェンを牢獄から救出しようとするが，その脱獄の申し出でを拒否し，明日の断頭台の露と消えることを決心し，グレートヒェンは神に全てを委ねる。「いいえ。神さま，お裁きくださいまし。この身をおまかせいたしました。（4605「牢獄」）「わたしはあなたのものでございます，神さま。お救いくださいまし。天使さまたち，どうかわたしのまわりをかこんで，おまもりくださいまし。」（4607「同上」）全身全霊を神に捧げるグレートヒェン，その祈りは天上において聞き届けられ，救済が準備される。贖罪の女たちがグレートヒェンに代わってマリアに懇願する：「なにとぞこの善き魂にも，それにふさわしいお赦しの恵みをお授けくださいまし。ただ一度自分を忘れただけで，自分が過ちをおかしていることにも心づかなかった魂でございます。」（12065 ⑤「山峡」）贖罪の女たちとは，罪深い女，サマリアの女，エジプトのマリアの三人で，その罪の深さと懺悔の心には計り知れないものがある。この懺悔の心も救済の大きな一因となっていよう。そして最終場では，マリアをあがめる博士が，輝く聖母であるマリアを讃え，悔いを知る全ての者の為に祈る：「処女よ，おん母よ，女王よ，神女よ，と

わにみ恵みを垂れたまえ。」（12101 ⑤「山峡」）グレートヒェンは救われたのである。

では，グレートヒェンを奈落の底に突き落としたファウストはどうなるであろうか。ファウストに対しても救済が用意されている。「第一部」で打ちのめされたファウストに対して，「第二部」冒頭で精霊アーリエルは歌う：「心正しい者にせよ，邪悪な者にせよ，不幸に沈む者に霊たちの憐れみはかかるのだ。」（4619 ①「優雅な土地」）救済するものの願いは，このように善悪を超えていよう。浄土思想的には阿弥陀の本願であろう。ファウストは死に，メフィストはファウストの魂を奪おうと虎視眈々と魂が身体から出て来るのを待ち構えているところへ，天使たちの声がする：「罪ある人をゆるし，はかなきものをよみがえらせよ。」（11679 ⑤「埋葬」）結局，メフィストはファウストの魂を奪い損なうという結末を迎える。天使たちは，更に，ファウストの魂（不死の霊）を運びながらより高い空中を漂い，「霊の世界の高貴なひとりが悪から救われました。どんな人にせよ，絶えず努力して励むものを，わたしたちは救うことができます。それにこの人には天上からの愛が加わったのですから，至高の幸に住む天上の群れは，心から歓んでいまこの人を迎えるのです。」（11934 ⑤「山峡」）と語り，ファウストの救済が宣言される。作者ゲーテは悪人ファウストを救済した。「天上からの愛が加わった」こともその理由のひとつであるが，ファウストのグレートヒェンに対する懺悔の心境は，物語の中のところどころに表れている。「ワルプルギスの夜」の魔女の狂宴の最中においても，ふと，グレートヒェンの幻影が現れる。危険をも顧みず，グレートヒェンの救出に向かった。ヘレナと別れた後も，流れ去る雲の形に，初恋のグレートヒェンの姿を重ね合わせる，等々である。また，何よりも，先に天上にいるグレートヒェンの懇願もマリアの心を動かしたのかも知れない。マリアはグレートヒェンに向かって：「さあ，おいで。もっと高みへお登り。お前がいると思うと，その人もついてくるから。」（12094 ⑤「山峡」）と，語りかける。

1)『梅原猛の「歎異抄」入門』，S. 144 ～ 146（原文及び訳文），梅原猛著，1999 年，プレジデント社。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

仏教思想がゲーテ及びゲーテの『ファウスト』に与えた影響について考えてみると，それは現在までのところ，全く関連はないとみるべきであろう。今後の研究如何にもよるであろうが，ゲーテが仏教を学んだ，という痕跡はないように思われる。それにも拘わらず，以上の考察のように，『ファウスト』の中には仏教的な思想が多く見られた，ということができよう。総じて，その立場は，欧米人，あるいは現代人特有の，現世利益を追求する，単なる利己主義的傾向が見られる，という意味では小乗仏教的である。例えば，「戦争にしろ平和にしろ，万事を利用して利をはかるのが，真の智者ですよ。ここぞという時を逃さぬよう，いつもねらっていることです。機会は来ました，さあ，先生，これをつかまえなさい。」（10235 ④「高山」）というメフィストの言葉に代表されるような，個人的な私利私欲，欲望の充足といった側面がファウストにはあった。これは単に「自利」，自己の利益のみを追求する人生観である。しかし，それでいてまた，大乗仏教的な立場にも立っていると言えよう。死の直前のファウストは，「こうしておれは何百万人のために土地を開くのだ。安全ではないが，働いて自由に暮らしてゆける土地だ。……おれはこういう群れをまのあたりに見て，自由な土地に自由な民とともに生きたい。」（11563 ⑤「宮殿の広い前庭」）と言い，「最高の瞬間」を味わう。この心境はすでに「利他」，他者のために，人類のために働く，という精神が身についている。「自利・利他」，大乗仏教的であろう。その実質はどうであれ，ファウストという人間を考えた場合，ほっとする一面である。また，東洋的，日本的「無常観」も見られるということにも，何となく安堵感がある。バウキスとフィレモンの住む，菩提樹に守られた小屋の近くには小さな礼拝堂がある。フィレモンが言う：「さあ，みんなで礼拝堂のほうに行って，沈んでゆく日に別れをつげよう。鐘を鳴らし，ひざまずいて，お祈りしよう，そ

して，昔からの神さまにおすがりしよう。」(11139 ⑤「広々とした土地」) その同じ鐘の音が，ファウストにとっては耳障りとなるのだが，「それにいまいましいことに，あのビーン・ボーンは，晴れわたった夕空を陰気にして，産湯から葬いにいたるまで，世の中のあらゆる出来事のなかに押し込んでくる。まるで人生というものが，ビーンとボーンの間にはさまってはかなく過ぎて行く夢だとでもいうように。」(11263 ⑤「宮殿」) と，ファウストも無常観を感じている。西と東では鐘の響きも異なるであろうが，同じ所業無常の鐘の音なのである。「ワルプルギスの夜の夢」の場面では，ピアニシモの管弦楽とともに，「うつる雲，ながるる霧は，高みより明るみゆく。木立に，葦に，風はわたる。かくてものみなは散り失せぬ。」(4395「ワルプルギスの夜の夢」) と声が聞こえる。まさに全ては夢の後。はかない無常の風が吹いている。フォルキアス（メフィスト）も言っている：「それは誰でも，長い年月のあいだにさまざまの幸福を享けていても，それをあとからふりかえれば，この上もない神のお恵みさえ，つまりは夢としか思えなくなるものです。」(8843 ③「スパルタの……」)

付記

『ファウスト』のドイツ語テキストは（Goethe Werke, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, Bd. 3, 11. Auflage, 1981）を使用した。引用箇所の表示はカッコ内に，はじめに開始行数を記した。次に第二部については幕数を①から⑤のように明示した。表示の無い場合は第一部である。最後に場面を表示した。日本語訳は，手塚富雄訳『ファウスト』，中公文庫全三冊（第一部：1992 年，第 6 版；第二部上巻：1991 年，第 4 版；第二部下巻：1995 年，第 5 版）を使用した。